

クモ類

① 千葉県におけるクモ類

千葉県のクモ類は、1975年までの研究については、大野正男氏により明らかにされている。1974年から1994年までに採集されたクモとして、浅間は1999年に35科348種類を報告している。2010年には谷川明男氏により410種記録された。

クモの分布では、年平均15度の等温線が「ナカムラオニグモ線」と命名され、ナカムラオニグモだけでなく、他の北方系のクモもほぼこの線を南限としている。これはほぼ本州南岸線・ハマオモト線と同じである。この線を境として、県の中北部は北方系の種が、南部は南方系の種が優位になっている。このように千葉県のクモ相は北方系と南方系の種が入り交じって分布している。県内に分布線のある北方系の種はナカムラオニグモ、南方系の種はチュウガタコガネグモ・アカイ

ロトリノフンダマシ・トビジロイソウロウグモ・クロマルイソウロウグモ・アカイソウロウグモ・イボカニグモである。またゴキブリキラーとして知られる世界共通種であるアシダカグモは、千葉市・銚子市より南部で繁殖している。県内は本格的な鍾乳洞が存在しないため、ホラヒメグモ科とマシラグモ科などのうち、洞窟に生息しているクモは記録されていない。また他県に比べて高い山がないため、クモの垂直分布もあまり顕著ではない。

クモはバルーニングによって分散し、生息環境が良ければそこに定着する。地球温暖化やその生息環境の悪化、及び生息地域の開発等によりクモの分布も大きく変化している。近年は他の地域と同じように、県内でも南方系の種の進出や北上が見られる。

② 選定基準

クモにおいては定量的な調査をしても、全体を把握するには至らない。1m枠の定量的な調査を実施しても、1m隣では水分の状況や餌の量の多少などから、桁違いの数のクモが採集される。またクモの網数などの違いは、餌量の関わりも大きい。そのため、長年観察してきたことをもとにして、環境の変化によって減少し、保護が必要とされる種を選定した。ここで取り上げた種以外でも多数の種が減少し、絶滅の危険性があると思われる。しかし、ただ珍しいという理由だけでは選定しなかった。また機械的にかつて記録されて、今生息が確認されないからという理由だけでは選定しなかった。あくまで、その種が減少して危機状態にあることを第一に選定条件とした。分布域が狭まったり、環境の変化により絶滅の危機にさらされていること、あるいは広範囲の地域に生息しているが、急激な減少が見られる種を選定した。

選定にあたっては、共通の評価基準としての五つのカテゴリーに分けた。今後千葉県のクモ相の解明により、多くの新知見が加わることにより、選定種が見直されて、より多くの種が追加されることが予想される。

X (消息不明・絶滅生物) : 絶滅のみでなく、消息不明種も入ることから、絶滅が確認されていないものも該当する。前述した選定基準により、今回は選定しなかった。

要保護度

- A (最重要保護生物) : 現在の生息場所が1~5ヶ所または1~5メッシュ (約5km²)
- B (重要保護生物) : 現在の生息場所が6~10ヶ所または6~10メッシュ (約10km²)
- C (要保護生物) : 現在の生息場所が11~50メッシュ (約50km²)
- D (一般保護生物) : 現在の生息場所が51~100メッシュ (約100km²) 以下

減少度 (率)

過去の生息状況 (1960年代頃) と2000年代での生息状況を比較し、以下の場合。

- A : メッシュ、市町村、産地単位で確認できない生息場所の減少が80%以上
- B : メッシュ、市町村、産地単位で確認できない生息場所の減少が50%以上80%未満
- C : メッシュ、市町村、産地単位で確認できない生息場所の減少が20%以上50%未満

D：メッシュ、市町村、産地単位で確認できない生息場所の減少が10%以上20%未満

以上二つの観点から次の10種を選定した。

A：カネコトタテグモ・ワスレナグモ・コケオニグモ

B：キシノウエトタテグモ・キノボリトタテグモ

C：コガネグモ・キヌアシナガグモ・シッチコモリグモ

D：ナカムラオニグモ・オニグモ

③ 保護を要するクモ類の概要と保護対策

前述の選定基準から、生息場所が限られており、開発等で絶滅の危険がある種と、県内での分布地域が狭まり減少が続いている種が選定された。

前者の要保護度の高い種は、生息地域が狭い種である。県内の特定の場所にしか生息していない種である。地中に住居をつくるカネコトタテグモ・キシノウエトタテグモ・ワスレナグモと、柔らかい樹皮上で住居をつくるキノボリトタテグモ、地衣類のある樹幹に網を張るコケオニグモ、溪流上で網を張るキヌアシナガグモである。地中や樹上に住居をつくるクモは生息地域がその場所に限定しているため、保護は比較的容易である。その一帯の生息場所の環境を維持すればよい。しかし、住居からの移動が少ないため、その場所が開発されたり、住居がある木が伐採されれば、絶滅してしまう。また地中性のクモでは、ワスレナグモ・ジグモ以外は、子グモの時にバルーニングが観察されておらず、遠くまで分散する可能性が少なく、近縁でない交雑をするためには、生息が可能な地域を数ヶ所は保全することが望ましい。コケオニグモは全国的にも珍しい種であり、地衣類のある場所に生息していることが多い。地衣類のついている樹木の保全が重要である。溪流上で

網を張るキヌアシナガグモは、近県ではあまり分布しておらず、県内でも内浦山県民の森と清澄山の溪流上でのみ確認されている。溪流上に伸びた細かい枝先に網を張る。自然状態の溪流を、そのままの良い状態で保全することが大切である。

後者の減少度の高い種は、コガネグモ・シッチコモリグモ・ナカムラオニグモ・オニグモである。比較的まだどこにでも見られる種であるが、年々減少傾向にある。コガネグモは草原のクモで、比較的良好に保たれている草原に生息している。その草原が減少し、コガネグモも見られなくなってきた。シッチコモリグモは今回の選定で、新たにつけ加えた種である。名前の示すように湿地に生息しており、またその分布も限られている。湿地の減少は、このクモにとっての生息場所の消失となる。ナカムラオニグモは北方系のクモで、地球温暖化とも関係があり、減少している。このクモは水辺の周辺のヨシ原などに円網を張るクモであるが、河川の三面コンクリート化などによる影響も大きいと思われる。オニグモは人家周辺で最も普通に見られるクモであるが、人間の生活習慣の変化などにより、餌不足などで減少している。

④ 情報不足種

以前に県内で報告されており、最近の調査でも生息が確認できない種が少なからずある。例えば、サヤヒメグモ・トゲグモ・シロスジグモなどである。これらは「X」の候補としてあげて検討したが、今回は選定しなかった。サヤヒメグモは生息環境・網型が不明であり、トゲグモは局地的に分布しており、分布については情報不足である。シロスジグモは南方系のクモであり、関東周辺から

の記録はない。一宮町の海岸近くの草原に1984年から1985年の2年に渡って出現したが、その後の記録はない。偶発的な可能性が高い。また減少度の高いクモとして、カラフトコモリグモとハラクロコモリグモなどの大型の徘徊性のクモについても検討したが、減少の理由がはっきりせず省いた。今後クモの生態の研究が進むにつれ、これらのクモを含め、見直しが必要であろう。

⑤ 記述様式

Xについては選定しなかったため、配列は「A」「B」「C」「D」に分けた。各区分の中の順番及び、学名と和名は、谷川明男(2010)に従った。選定種における記述は、基本的に種の特性、分布、県内の状況、保護対

策、引用文献、写真の6項目とした。また、各種について分布図を作成した。分布図については、千葉県におけるこれまでの記録について、文献等のデータを収集することにより作成した。分布図は基本的に市町村単位で表示した。

⑥ 引用文献

浅間茂 (1985) 真正クモ類. 「千葉県立中央博物館(仮称) 収集目標資料の目録-動物・地学部門(その1)」, pp.72-75.

浅間茂 (1986) 小櫃川クモ類調査. 「千葉県小櫃川生物生態調査報告書」, pp.52-55.

浅間茂 (1987a) 山倉ダム周辺緑地環境保全地域 クモ類. 「千葉県自然環境保全地域等適地調査」, pp.128-134.

浅間茂 (1987b) 東京蜘蛛談話会 昭和59年度(1984) 合宿報告 内浦山県民の森の真正蜘蛛類. KISHIDAIA 55: 25-30.

浅間茂 (1993) 千葉県立中央博物館生態園とその周辺の動物相調査資料 クモ類の標本. 「平成3年度標本資料収集 動物・植物標本目録」, pp.56-61.

浅間茂 (1995) 千葉県のクモ類. 「新版千葉県の生物」(日本生物教育会第50回全国大会(千葉大会) 記念誌作成部編), pp.148-151.

浅間茂 (1996) クモ類. 「千葉県の自然誌本編1」(千葉県資料研究財団編), pp.345-350.千葉県.

浅間茂 (1999) 千葉県のクモ類. 「千葉県動物誌」(千葉県生物学会編), pp.145-178. 文一総合出版, 東京.

浅間茂 (2000) クモ目録. 「鎌ヶ谷市史 資料編Ⅶ(自然)」, pp.453-458.

浅間茂・本間雅彦 (1981) 七百余所神社の森 クモ類. 「千葉県環境保全学術調査報告書」, pp.73-74.

浅間茂・笹岡文雄・平松毅 (1995) 千葉市柏井市民の森のクモ相. 「千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告Ⅲ」, pp.243-259.

浅間茂・笹岡文雄・長嶋充・平松毅 (2000) クモ類. 「佐倉市自然環境調査報告書」, pp.327-346.

浅間茂・笹岡文雄・貞元己良・平松毅 (1994) 千葉市におけるクモの生息状況及び生態系調査. 「千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告Ⅱ」, pp.399-424.

馬場友希 (2010) 千葉県松戸市「21世紀の森と広場」のクモ. KISHIDAIA 97: 59-67.

畑守有紀・新海明・上田俊穂 (1997) クモタケの全国分布調査結果. KISHIDAIA 72: 34-47.

加藤輝代子・中條竜太・植松いのり (2009) 白井市のクモ類相. 「白井市生物多様性調査報告書」, pp.325-344.

木村知之 (1994) 千葉県清澄で採集されたコケオニグモ♀. KISHIDAIA 67: 47.

近藤照夫 (1975) 習志野市の真正クモ相. 「習志野市の自然環境と生物相」, pp.104-126.

松本誠治 (1973) 東邦大学内のクモ類. MIMOSA 3: 51-56.

長嶋充 (1997) 千葉県佐倉市で記録された真正クモ類. KISHIDAIA 70: 13-20.

中西亜耶 (2007) キシノウエトタテグモの仔グモ親巢からの分散距離. 東京クモゼミ報告 177.

大野正男 (1973) 千葉県のクモ類研究史. 敬愛短大生物研究会々報 5: 39-52.

大野正男 (1974) 千葉県のクモ類研究史(2). 敬愛短大生物研究会々報6: 1-6.

大野正男 (1975) 千葉県のクモ類研究史(3). 敬愛短大生物研究会々報7: 49-51.

大野正男 (1975) ニホンザルの食料源としてみた高宕山の動物第2報. pp.155-181.

斉藤吉永 (1964) 千葉県柏市蜘蛛類目録(1). pp.1-16.

新海明 (1994) 清澄山(東京大学千葉演習林内)の真正クモ類. 清澄 14: 23-31.

新海明（2007）ワスレナグモの全国分布調査結果. KISHIDAIA 92: 39-52.
新海明（2010）清澄山でクモタケを発見. 清澄 15: 55-56.
新海明・金野晋・畑守有紀（2002）房総丘陵でのキシノウエトタテグモとワスレナグモの新産地. KISHIDAIA 83: 57-58.
新海明・栗原輝代子（1975）林縁のクモとリター中のクモ. 「房総丘陵清澄山・高宕山地域の自然とその人為による影響（第4報）」, pp.35-39.

新海明・谷川明男（2000）採集情報. 遊絲 7: 15-16.
新海明・谷川明男（2002）採集情報. 遊絲 11: 15-16.
谷川明男（2010）日本産クモ類目 ver.2010R2. CD-ROM.
東葛飾土木事務所（2003）富士川・今上落における貴重種の確認状況. pp.1-8.
八幡明彦（2002）千葉県野田市（利根運河）三ヶ尾のクモ. KISHIDAIA 83: 31-47.

A カネコトタテグモ カネコトタテグモ科

国：準絶滅危惧種 (NT)

Antrodiaetus roretzi (L.Koch,1878)

千：A-A-A

【種の特異性】 体長は雌 12-18 mm、雄 9-13 mmである。崖地に深さ 10-20 cmほどの横穴の住居をつくり、両開きの扉をつける。住居は曲がりくねっており、石や木の根の間に伸びている。扉の近くにきた虫を捕らえる。局地的に分布している。

【分布】 岩手県から兵庫県までの本州に分布する。

【県内の状況】 市川市中山で 1986年(クモの会 確認)、佐倉市城址跡で 1990年(大久保 確認)、船橋市前原で 1992年(貞元 確認)、佐倉市の宮小路町で 1997年(長嶋, 1997) の記録しかなく、いずれも県北部である。佐倉市の宮小路町の旧武家屋敷周辺には数ヶ所に分布しており、切り通しの脇の斜面でキシノウエトタテグモと一緒に見られる。子グモの分散で空中飛行が確認されておらず、今後県南部で発見できなければ、その分布は、地史と関係があると思われる。

【保護対策】 生息が確認された地域の生息環境を保全することが望ましい。

【引用文献】 浅間(1999) / 長嶋(1997)

【写真】 P.183

(浅間茂)



カネコトタテグモ

A ワスレナグモ ジグモ科

国：準絶滅危惧種 (NT)

Calommata signata Karsch, 1879

千：A-A-A

【種の特異性】 体長は雌 15-18 mm、雄 6-8 mmである。草原や芝生などの地中に縦穴を掘り、深さ 10-20 cmほどの管状の住居をつくる。入り口には扉がなく開いたままである。入り口から地面に放射状の触糸を張っていて、虫がくるのを待つ。

【分布】 本州・四国・九州に分布している。

【県内の状況】 習志野市で 1973年東邦大学校内(松本, 1973) と 1975年の新栄(近藤, 1975)、柏市で 1989年の記録(浅間, 1999) しかなかった。いずれも県の北部である。柏市の記録は、県立東葛飾高校内の中庭のコンクリートでできた敷石のきわで確認された。近年、船橋市の日大校内では多くの個体が生息していることが分かった(新海, 2007)。また南部でも生息が確認された。富津市宇藤原(新海・金野・畑守, 2002)・君津市広岡(新海・金野・畑守, 2002)・君津市折木沢(新海, 2007)・君津市三島小学校(尾崎, 2008確認) である。三島小学校では、多くの個体が確認されている。

【保護対策】 生息が確認された地域の生息環境を保全することが望ましい。

【引用文献】 浅間(1999) / 近藤(1975) 松本(1973) / 新海(2007) / 新海・金野・畑守(2002)

【写真】 P.183

(浅間茂)



ワスレナグモ

A コケオニグモ コガネグモ科

国：掲載なし

Aranus seminiger (L.Koch 1878)

千：A-A-A

【種の特異性】 体長は雌 20 mm、雄 14 mmである。林の中に住み、大型の垂直の円網を張る。夜間は円網の中心にいるが、日中は地衣類の生えた樹皮に潜む。稀産種であり、生態もよく分かっていない。

【分布】 北海道・本州・四国・九州・南西諸島に分布している。

【県内の状況】 柏市酒井根で 1964年(斉藤, 1964)、高宕山で 1975年(大野, 1975)、清澄山東大演習林で 1994年(木村, 1994)、佐倉市佐倉市民の森で 1997年に記録されている(長島充 未発表)。1997年には佐倉市の市民の森内だけで4個体確認されており、国内でもほとんど記録がない状況で、特記すべきことである。残念ながらその後、その場所では確認されていない。しかし、今後とも注意を払うべき場所である。清澄山ではその後、東大演習林の清澄宿泊所では 2000年(新海・谷川, 2000) に、札幌作業所では 2000年と 2002年(新海・谷川, 2000; 新海・谷川, 2002) に記録されている。

【保護対策】 生息が確認された地域の生息環境を保全することが望ましい。特に地衣類が生えた樹木に網を張ることが多いので、地衣類の生えた樹木の維持管理が大切である。

【引用文献】 木村(1994) / 大野(1975) / 斉藤(1964) / 新海・谷川(2000) / 新海・谷川(2002)

【写真】 P.183

(浅間茂)



コケオニグモ

B キシノウエトタテグモ トタテグモ科

国：準絶滅危惧種 (NT)

Latouchia typica (Kishida, 1913)

千：B-B-B

【種の特性】 体長は雌 10-15 mm、雄 9-12 mm である。神社やお寺の境内、人家の踏み石のわき、崖地などに見られる。住居の入り口は片開きの扉をつける。地中性のクモは見つけにくい、このクモは梅雨時期にクモタケがでる。クモタケにより生息が発見されることが多い。雄のクモは9月から10月にかけて交接のため住居をから出て徘徊することが知られている。人家の室内で雄が徘徊しているのを目撃した報告例もある。

【分布】 本州・四国・九州に分布している。都市部に多く、山地では少ない。

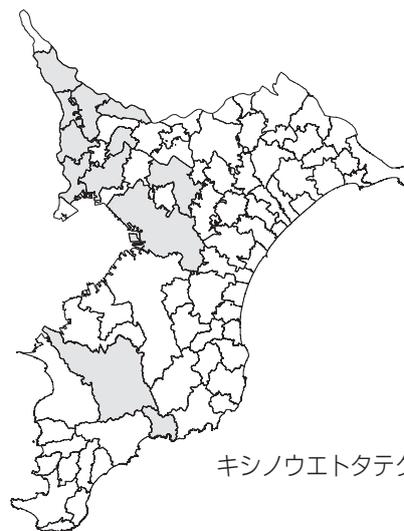
【県内の状況】 内浦山で1987年、柏市で1989年、佐倉市で1990年、市川市で1992年、千葉市で1994年の記録(浅間, 1999)がある。比較的まとまって分布しているのは、佐倉市の宮小路町の武家屋敷周辺である。内浦山は県民の森の崖地、柏市は県立東葛飾高校の敷地内、千葉市では柏井の谷津田近くの農家脇と泉自然公園である。いずれも土地が攪乱されていない場所である。清澄寺(畑守・新海・上田, 1997)・君津市(新海・金野・上田, 2002)・野田市(八幡, 2002)・流山市(東葛飾土木事務所, 2003)・船橋市(中西, 2007)・白井市(加藤・中條・植松, 2009)・松戸市(馬場, 2010)・我孫子市(浅間, 2010室内採集)などにも分布しており、県内に比較的広範囲にわたって分布しているものと思われるが、外房からの発見例はない。船橋市の東邦大習志野キャンパスでは、生息個体数が多く調査研究が進められた。県内のクモタケの確認場所は、松戸市の千葉大園芸学部・天津小湊町の誕生寺・佐倉市の佐倉城址公園・流山市のボーイの森・市川市の国府台などである(新海, 2010)。

【保護対策】 生息が確認された地域の生息環境を保全することが望ましい。

【引用文献】 浅間(1999) / 馬場(2010) / 畑守・新海・上田(1997) / 加藤・中條・植松(2009) / 中西(2007) / 新海(2010) / 新海・金野・上田(2002) / 東葛飾土木事務所(2003) / 八幡(2002)

【写真】 P.183

(浅間茂)



キシノウエトタテグモ

B キノボリトタテグモ トタテグモ科

国：準絶滅危惧種 (NT)

Conothele fragaria (Donitz, 1887)

千：B-B-B

【種の特性】 体長は雌 9-11 mm、雄 6-8 mm である。マツ・スギ・ヒノキなどの樹皮の窪みを利用して、コケや樹皮を貼り付けた住居をつくる。入り口には片開きの扉をつけるが、下向きが多い。

【分布】 本州・四国・九州・南西諸島に分布する。

【県内の状況】 1973年以前の記録では、鴨川市の江見・千葉市の土気・清澄山・館山市神余(大野, 1973)がある。その後、清澄山(新海・栗原, 1975)・八千代市七百余所神社(浅間・本間, 1981)・山倉ダム(浅間, 1987a)・内浦山(浅間, 1987b)・旧大栄町大慈恩寺(浅間, 1996 確認)の記録がある。このクモは、コケの生えた大木の柔らかい樹皮を利用して住居をつくっている。県内の調査では、一本の木から数十個体の住居を確認できるが、周辺の木にはあまり生息が確認されない。

【保護対策】 生息が確認された地域の生息環境を保全することが望ましい。特にコケの生えた老木の維持が大切である。

【引用文献】 浅間(1987a) / 浅間(1987b) / 浅間・本間(1981) / 大野(1973) / 新海・栗原(1975)

【写真】 P.183

(浅間茂)



キノボリトタテグモ

C コガネグモ コガネグモ科

Argiope amoena L.Koch, 1878

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 体長は雌20-25 mm、雄5-6 mmである。水田・草原・人家の周辺などに大きな垂直円網を張る。網の中心に×の隠れ帯をつけることが多い。トンボ・カマキリ・アブラゼミなどの大型の昆虫も捕食する。

【分布】 本州・四国・九州・南西諸島に分布する。

【県内の状況】 ほぼ県内全域から記録されており(浅間, 1999)、全ての市町村に生息していると思われる。1999年以降の各地域での採集記録も多く、珍しいクモではないが、都市周辺部から減少しているクモである。草原性で、草原面積の減少が大きな要因と思われる。また大きな円網を張り、大型の昆虫も捕食するので、餌の減少も大きいと推定される。コガネグモが生息することは、草原が良い状態で保たれているという目安ともなる。

【保護対策】 生息が確認された地域の生息環境を保全することが望ましい。さらに広い草原を設け、その維持管理が大切である。

【引用文献】 浅間茂(1999)

【写真】 P.183

(浅間茂)



コガネグモ

C キヌアシナガグモ アシナガグモ科

Tetragnatha lauta Yaginuma 1959

国：掲載なし
千：C-C-C

【種の特性】 体長は雌は4.5-6 mm、雄3.5-4.5 mmである。側面は淡緑色の金属光沢を持つほっそりとしたクモである。山麓の日当たりの良い草間に、縦糸が4本で四角い網を張る。他のクモで四角の網を張るクモはいない。

【分布】 本州・四国・九州・南西諸島

【県内の状況】 内浦山(浅間 1985)・小櫃川四方木(浅間, 1986)・清澄山(新海, 1994)の記録がある。いずれも清澄山と、隣接した内浦山の渓流上での記録である。渓流の上に張り出した枝先の間に、細い糸で四角い網を水平あるいは斜めに張っている。他県でも、スィーピングでの記録はあっても、その生態はあまりわかっていなかった種である。貴重な分布であり、この地域に定着しているのも明らかである。

【保護対策】 定着している清澄山・内浦山の渓流を保全することが望ましい。

【引用文献】 浅間(1985) / 浅間(1986) / 新海(1994)

【写真】 P.184

(浅間茂)



キヌアシナガグモ

C シッチコモリグモ コモリグモ科

Hygrolycosa umidicola Tanaka 1978

国：掲載なし
千：無-無-C

【種の特性】 体長は雌6-7 mm、雄5.7-6.1 mmである。湿地や湿気のある雑木林の林床などで見られる。頭胸部の中央に縦の一本の黒褐色の細い条があるので、他のコモリグモと容易に見分けがつく。

【分布】 北海道・本州

【県内の状況】 手賀沼(浅間, 1986 採集)・山倉ダム(浅間, 1987)・千葉市中央博生態園(浅間, 1993)・千葉市大草(浅間・笹岡・貞元・平松, 1994)・千葉市柏井(浅間・笹岡・平松, 1995)・鎌ヶ谷市中沢・佐津間(浅間, 2000)・佐倉市印旛沼(浅間・笹岡・長嶋・平松, 2000)・松戸市21世紀の森と広場(馬場, 2000)・野田市三ヶ尾(八幡, 2002)の記録がある。いずれの場所も、ヨシ原などが茂っている湿地である。このクモは水田では見かけない。北方系のクモで、県内の比較的北部で記録されているが、今後調査が進むと南部でも発見される可能性がある。ヨシ原などの湿地の減少は、生息場所としているシッチコモリグモに大きな影響を与える。

【保護対策】 人にとって無駄な場所と思われる湿地は、このクモをはじめとして、多くの生物の生息場所となっている。生息場所の湿地を保全していく必要がある。

【引用文献】 浅間(1987) / 浅間(1993) / 浅間(2000) / 浅間・笹岡・平松(1995) / 浅間・笹岡・長嶋・平松(2000) / 浅間・笹岡・貞元・平松(1994) / 馬場(2000) / 八幡(2002)

【写真】 P.184

(浅間茂)



シッチコモリグモ

D ナカムラオニグモ コガネグモ科

国：掲載なし
千：D-D-D

Larinioides cornutus (Clerck, 1757)

【種の特性】 体長は雌9-11 mm、雄7-8 mmである。沼や河川、湿地近くの草原に垂直あるいは斜めの円網を張る。その一端に草木の葉を折り曲げて住居をつくり、その中に潜んでいる。

【分布】 北海道・本州・四国(山地)

【県内の状況】 かつては九十九里浜一帯に分布していたという報告があるが、現在は旧光町干草沼(浅間, 2004採集)に生息が確認されたのみである。地球温暖化の影響もあるが、湿地や自然の川原などの減少も要因のひとつと考えられる。房総南部では生息が確認されていない。水辺で円網を張っており、その一端の草に袋状の住居があるので、容易に他のクモと区別がつく。県内では中北部では多くの記録(浅間, 1999)があるが、1999年以降の記録でも同様な分布地域で、水田や水路の周辺など、ほとんど水辺近くで記録されている。市原市や富津市など南限の分布線にあたる地域の生息状況に注意を払う必要がある。

【保護対策】 生息している地域の自然の川原、湿地の保全が望ましい。

【引用文献】 浅間(1999)

【写真】 P.184

(浅間茂)



ナカムラオニグモ

D オニグモ コガネグモ科

国：掲載なし
千：D-D-D

Araneus ventricosus (L.Koch, 1878)

【種の特性】 体長は雌20-30 mm、雄15-20 mmである。昼間は軒下などの物陰に隠れ、夕方になると大きな網を、軒下や庭陰に張り始める。網を張り終えたクモは、網の中心部にじっとして餌のかかるのを待つ。私たちの最も身近なところで生活しているクモである。

【分布】 北海道・本州・四国・九州・南西諸島

【県内の状況】 人家周辺に生息し、県内ほぼ全ての市町村に分布している(浅間, 1999)。1960年代には民家の軒下のどこにでも見られたオニグモは、あまり見られなくなった。都市化が進むと同時に、市街地から姿を消してしまう。夕方になると餌となる昆虫の量が、家の周辺に少なくなったためと思われる。昆虫の生息場所が奪われ、そしてそれを餌とする高次消費者であるオニグモが減少した。1999年から2010年にかけては大きな変化は見られない。

【保護対策】 住宅地の近くにいろいろな生物が住める草原や、自然度が高い公園を整備することが望ましい。

【引用文献】 浅間(1999)

【写真】 P.184

(浅間茂)



オニグモ

